

十日町・津南版「新之助」栽培暦

2024. 3. 改定

【品種の特徴】

- 出穂期及び成熟期は「コシヒカリ」に比べ6日及び7日程度遅い晩生のうるち種
- 極良食味で高温耐性が強い
- 草型は偏穂数型
- 耐倒伏性はやや強。穂発芽性は中
- 千粒重はコシヒカリに比べ約1g重い
- いもち病は場抵抗性は、葉いもちがやや弱、穂いもちが弱（従来コシヒカリより弱）
- 障害型耐冷性は弱
- 作付けは標高300m以下とする。

【生育のめやす（稚苗・中苗育苗、5月中～下旬移植）】

生育ステージ	葉数 (葉)	草丈 (cm)	茎数 (本/m ²)	葉色 (SPAD)
最高分げつ期 (7月5日頃)	10.5	48	580~600	36~38
幼穂形成期 (7月19日頃)	12.0	69	530~540	33~35
1回目穂肥時 (7月22日頃)	12.3	72	500~530	33~35
2回目穂肥時 (7月31日頃)	—	—	—	33~35
出穂期 (8月12日頃)	14.0	稈長80	385	33~35

【収量、収量構成要素及び品質の目標】

目標収量	540kg/10a
穂数	385本/m ²
一穂粒数	73粒
m ² 当たり粒数	28,000粒
精玄米粒数歩合	82%
千粒重	23.5g
整粒歩合	70%以上
玄米タンパク質含有率	5.8% (上限6.3%)

【主な作業と生育ステージ及び管理のポイント】

月 日	4月			5月			6月			7月			8月			9月					
	20			10 20			10 20			10 20			10 20			10 20					
主な作業と 生育ステージ	は種			田植え			中干し			最高分げつ期			穂肥1 幼穂形成期			穂肥2 出穂期			〔通水最終日に十分かん水〕 落水出穂期 25日後以降 収穫成熟期		

基肥施用
<ul style="list-style-type: none"> 大豆等跡や基盤整備直後の高地力ほ場、秋落ちしやすいほ場での作付けは避ける。 基肥量は、地域慣行のコシヒカリ並を基本とし、地力や使用する資材等に応じて加減する。窒素成分で3.5~4kgをめやすとする。

田植え
<ul style="list-style-type: none"> 田植えは5月中旬をめやすに、遅くとも5月末までに行う。 栽植密度は50株/坪とし、過度な疎植は避ける。 1株苗数は3~4本とする。

中干し・溝切り
<ul style="list-style-type: none"> 中干しは遅くとも田植え1か月後をめやすに、目標穂数の80%を確保したら直ちに開始し、出穂期1か月前までに終了する。 溝切りは、中干しの効果を高めるため、必ず実施する。

病虫害防除
<ul style="list-style-type: none"> 葉いもち防除は、育苗箱施用により必ず行う。また、予防防除後も十分に抑えられない場合は、追加防除を行う。 穂いもち防除は必ず行い、特に葉いもちの発生が多い場合には防除回数を2回とする。 斑点米カメムシ類防除は、畦畔等の草刈りと加害種に応じた薬剤防除を行う。 その他病虫害も予防防除や発生に応じた薬剤防除を適宜行う。

穂肥施用と登熟期の水管理
<ul style="list-style-type: none"> 穂肥は1回当たり窒素成分で1~1.5kgの範囲内で加減し、出穂期21~18日前と12~10日前の2回施用する。(全量基肥を除く) 生育がめやすを大幅に超える場合は、施用量を控える。 登熟期間の高温が予想される場合は、出穂期3日前(かつ2回目穂肥から1週間御以降)の葉色を確認した上で追肥(3回目穂肥)を検討する。 出穂期25日後までは適切な飽水管理を行い、通水最終日には十分かん水する。

収穫・乾燥・調製
<ul style="list-style-type: none"> 収穫適期は黄化粒割合が85~90%、積算温度1,050~1,100℃程度をめやすとする。登熟期に高温が続いた場合は50℃程度(2日程度)早める。 コシヒカリと刈取りが競合した場合は、新之助を優先する。 胴割粒の発生を防止するため、乾燥作業は籾水分を確認し適正な温度と速度で行い、急激に乾燥させない。 篩い目は1.9mm以上を使用し、整粒歩合が70%以上になるよう調製する。